

ひとりでできるよ

—— インドネシアの障がい児教育から見てきたもの ——

前ジャカルタ日本人学校 教諭

大阪府大阪市立長吉中学校 教諭 古川 尚子

キーワード：ジャカルタ、障がい児教育、水泳、土曜日活動、多文化共生

1. はじめに

「センセイハ センモンカダネ〜！ ワタシニモ オシエテ〜！！」「センセイノ ゲンキ チョウダ〜イ」「キョウハ ナンジカン プール？」インドネシア人教員はいつも私に笑顔で声をかけてくれた。そんな気さくな人々に囲まれていたおかげで、私はジャカルタ日本人学校での3年間をのびのび働くことができた。何かをしたい時にはすぐにインドネシア人教員のもとへ相談に行き、自分の思いと企画を聞いてもらう。今まで取り組んだことがなくてもインドネシア人教員たちはいつも「バグース！（いいね）、センセイハ ピンタールね（先生は賢いね）」と言って実行に向けて協力してくれた。そんなおだてが心地よく、同期の派遣教員とはよく自分たちの想いを語り合い、互いに学年行事の成功を支え合った。

そんないつもお世話になっている先生方のインドネシアの教育に対する思いを聞く中で「私にできることがあったら、声をかけてください」と伝えていた。現地は土曜日まで学校があるため、インドネシア人教員が手弁当で行っている現地小学校教員への自主研修会や障がい児に向けて開かれている訓練学校等へ連れて行ってもらう、それらの活動を通じて、日本の教育課程や教員養成課程が尊重されている実態を知った。座学中心のインドネシア教員養成課程に対して、実技や実地がある日本の研修方式でのニーズは高かった。現にジャカルタ日本人学校へも多くの現地校の先生方が研修に来られていた。

2. 本活動実施の背景

(1) きっかけ

これは、「日本人学校がインドネシアの教育のためにできることがあるのであれば積極的に貢献し、そこで学んだことを日本人学校での教育に取り入れていってほしい」という校長先生の日頃からのお考えを受けて、派遣2年目が終わろうとしていた2015年2月に動き始めた活動である。

インドネシア人教員E先生が「センセイ、ホントウニ ドヨウビハ イソガシクアリマセンカ？」「もちろん！」「ジャァネ センセイ ワタシノ ムスコニ スイエイヲ オシエテアゲテクダサイ。コウチョウセンセイモ オシエテクダサイ トイッテイマス」この会話で水泳教室がスタートした。水泳教室は“MATAHARI BERENANG”と名付けた（MATAHARI：マタハリ は太陽という意味。BERENANG：ブルナン は泳ぐという意味。今回新設された学校名をいただいた）。きっかけをつくってくださったE先生は、当時8歳のお子さんがダウン症で、彼が夢中になれる活動を探していた。このタイミングでその子どもが通う学校の校長先生が学校を新設するという話がもち上がり、彼らの土曜日活動のねらいに合致したため、水泳教室を任せてもらうことになった。そして、水泳教室が軌道に乗ったころ子どもの数も増え、日本人学校の教員の協力を得られるようになり、土曜日の自主研修という形で、数名の同僚がボランティアに来てくれるようになった。

(2) インドネシアにおける障がいのある人に対する考え方と制度

インドネシアは、約2億5千万人の人口を抱える多民族国家である。「パンチャシラ」と呼ばれる建国5原則で唯一神への信仰を第1原則としており、宗教の共存を国家の柱としている。国民の90%ほどがイスラム教徒であり、イスラム教徒が行うべき五行のうちの1つ「喜捨（きしゃ）」では、財産の一部を社会的な弱者に

施すことが示されている。助けなければならない人として、お年寄り、障がいのある人、病人、孤児、貧しい人などがあげられる。コーランの教えにあるように喜捨の精神が地域に根付いており、言い換えると“地域で支える”精神があると言えよう。

インドネシア政府は、コミュニティ・ベースド・リハビリテーション（CBR）センターを設置し、5歳までの子どもの保健活動を通して障がい児の早期発見や対処をしている。また、ボランティアの訓練や基本的なリハビリテーションの提供、特別支援学級の先生を対象とした勉強会の開催や大人になってからの自立を目指すプログラムなどを提示している。更にインドネシア障がい児ケア協会（YAYASAN PEMBINAAN ANAK CACAT: YPAC）は、日本で言う特別支援学校を開設し、子どもたちのサポートを行っている。

(3) インドネシアの障がい児を取り巻く環境

インドネシア国民の就学率は60%とも言われており、教育の必要性の啓発が全体的に必要な。制度的には障がいのある子どもの学校への受け入れは、大きく4つに分けられる。1つ目は、公立学校への受け入れ。2つ目は、裕福層の家庭が通うことのできる私立学校に限られた人数のみの受け入れ。3つ目は、貧困層の家庭のために開かれた私立学校での門戸が広い受け入れ。4つ目は、専門的な教育を受けることができる特別支援学校や訓練施設（公立も私立も）での受け入れである。しかし、障がいのある子どもがいる家庭では、子どもを家族が囲ってしまい、なかなか外に出そうとしない傾向がある。それ故、教育を受けさせることなく親が生活全てを補ってしまい、子どもの自立に繋がらないケースがまだ多く見られる。また、スポーツ教室に入りたいという希望を出しても「障がい児を指導する専門の指導者がいないので受け入れることはできない」と断られるケースもある。

3. 実践記録

(1) 学校紹介

「障がいのある子どもたちや恵まれない子どもたちにも教育を！」と一念発起し、現地の教員ではない同志3人で学校を開設したが、“SEKOLAH MATAHARI”（SEKOLAH：学校という意味）である。子どもたちは月曜日から金曜日まで通い、身辺自立や言語活動、宗教など個に応じた教育を受けている。また、土曜日は自校の生徒を休ませ、孤児院にいる子どもたちを集めて教育活動を行っている。3人が大切にしていることは、教育の場を平等に提供するということである。また、自分で出来る事を教え、自ら取り組ませる。そして、自校生徒には土曜日活動を課外で提供していた。この課外活動の提供を大切にしたい意図は、生活リズムを整え、個別の課題を与えることにより、意欲的に生活し、自分を高めていく力を身につけて欲しいという願いからである。

(2) “MATAHARI BERENANG”で私が大切にしたこと

“MATAHARI BERENANG”（以下、マタハリと記す）では、日本方式の教育が求められていた。日本式の教育とは、時間を守る、計画的に学びを深めていく、礼儀を身につける等といったことである。そのため、E先生と立てた約束は、以下の通りである。

- ① 時間を守る—準備のために活動時間より早く来る。活動時間は延長しない。
- ② 計画的に学びを深める—練習課題を明確にし、一度課題を達成したとしてもできなくなった場合には、課題をさかのぼって確認する。（系統的な指導）
- ③ 礼儀を身につける—あいさつ（イスラム教のあいさつ：サラーム）やお礼を言う、活動時間内にむやみにお菓子を食べない等。

①と②はすぐに受け入れてもらい、協力的であった。しかし、③のお菓子を食べないという部分は、子どもが欲しがらるから与えてしまう傾向があった。そこで、保護者に練習場から離れてもらい、子どもにはテンポよく練習課題を提示し、練習のスタイルを定着させていった。陰からわが子が水泳に熱中する姿を見つめるうちに、保護者も約束を受け入れてくれ、保護者自身が「だめ」と言っ、プールの頑張ってくるよう声をかけてくれるようになった。すべては、毎回の積み重ねの中で、子どもが水泳教室を楽しみにする姿があり、できることが増えている姿を認めてくれたからである。

(3) 活動形態

月に2回を定例練習会とし、以下のタイムスケジュールで活動を行った。

7時30分：集合、挨拶や練習道具の用意、準備体操
8時～9時：練習
9時～9時30分：片付け、シャワー、ご飯、出席簿にシール イスラム教の挨拶（サラーム）で終わる。

互いに活動に慣れてくると、練習回数を増やしていくことができた。しかし、断食月には、口などから水が入ってくる水泳は行えず、長期休暇とした。

(4) 変容

①子どもたちの成長

全体では、準備を通して物を大切に扱うようになった。また、(系統的な)練習の流れを定めることで、自主的に練習できるようになった。練習方法をいくつか提示することで、自分に必要な方法を選ぶことが出来るようになった。そして、一緒に練習する中で他者を意識し、一緒に練習する仲間が居ることで支え合うようになっていった。写真カードなどの視覚支援を加えることで、個別のニーズに沿った細やかな支援ができたし、言葉の壁を払拭できた。何より、水泳が好きになり、出来る事が増えたことが子どもたちの自信となり表情が豊かになった。小さなことでも繰り返し行うことが、力の定着に繋がる様子が顕著に見られた。

子どもたち一人ひとりの変容を見ると、水遊びが好きだったAが「遊び」と「上手になるための練習」を切り替えて取り組めるようになった。顔をつけることをこわがっていたHが、自分で小さな目標を立てて1つずつ達成していき、できることを増やしていった。新しい場所への参加を過剰におびえるRが、お母さんや友だちの誘いに大泣きをしながらも参加し、私との水泳練習ができるようになり笑顔を見せてくれた。お菓子が食べたくて仕方がなかったJが、その日の予定を頭に入れて練習を開始し、終わるまではお菓子が欲しいと言わなくなった。何事にも積極的に挑戦するJRは、新しく手伝いに来てくれた先生に説明するとき、必ず横で見本を見せてくれた。日本語は分からないはずなのに、やるべきことをしっかり理解してくれている様子がうれしかった。

②保護者の変容

最初は、日本人が指導者ということで不安に思う保護者もあり、4人の子どもたちとのスタートとなった。しかし、回を重ねるうちに水泳教室に参加している子どもたちが土曜日を楽しみにしている姿やできることが増えていく様子が伝わり8人全員が水泳教室に参加してくれるようになった。そして、保護者は時間を守り、継続して参加させてくれるようになった。

水泳教室に来ると、サンダルを靴箱に片づけることや着替えなど、子どもたちができることを見守ってくれるようになった。子どもが練習中にお菓子を要求しても毅然とした態度で練習に戻してくれるようになった。こうした保護者の協力が、子どもたちの成長に大きな影響を与えてくれた。

③水泳教室の継続

私の帰国の時期が来た。マタハリに関わる全ての人が継続を願っていた。

私には、この取り組みを一緒に行ってきた日本人学校の教員（日本人もインドネシア人も）が引き継いでくれるならば、この間に育まれてきたより良い環境が根付いていくという見通しと安心感があった。“SEKOLAH MATAHARI”の先生方も水泳教室を盛り上げるために、時間の許す限り一緒に練習し、水泳を身につけようと努力してくれるようになっていた。

各方面の尽力により、私の帰国後もジャカルタ日本人学校の教員を中心に活動を継続していく運びとなった。継続決定を伝えると泣いて喜んでくれた。

使った物を各自で片付ける



自分で目標設定を行い、取り組むH。
「一人できるよ！」の声かけに対して挑戦する姿



一人で3つの宝を取れた！



(5) 国際交流

マタハリの活動を通して、インドネシアの人々との交流を深め、互いに民族の違いを超えて関係を築くことができた。そんな折、2016年1月14日に発生したISが表明したテロに対して、ジャカルタ日本人学校では、中学3年生のみんなと「祈りを捧げたい」と考え、【Pray for JAKARTA】と題し、千羽鶴を作成した。学校ではインドネシア人教員と事件のことをふり返り、インドネシア語初級グループは千羽鶴の作り方をインドネシア語で学習し、インドネシア語上級グループは折り鶴という日本文化をインドネシア語で説明する文章と【Pray for JAKARTA】に取り組むねらいを整理した。鶴は、生徒たちが関わるインドネシア人（事務室の皆さん、用務員さん、カフェのお姉さん、インドネシア人スタッフ用食堂の方々、セキュリティーさん、バスの運転手さん、バスの添乗員さん、芝刈りのスタッフ、家庭にいる家政婦さんや運転手さん、インドネシア人の家族や友人）と折った。

この取り組みについてマタハリのみんなと話をしたところ、なんと次の週には色とりどりのたくさんの鶴を折ってきてくれた。マタハリのみんながテロの犠牲者に対してイスラム教の祈りを捧げたことに加えて、日本式の祈りにも思いを寄せてくれたことに目頭が熱くなった。

4. まとめ

私自身も「外国人」でありながら、インドネシアで居場所が欲しかった。この思いを自分の一番大切にしている「水泳」を通して、地域貢献という形で実現できたことで、自分らしさの保持にもつながった。安全面や一人で取り組みを始めていくうえで、口では「やりましょ！」と気丈に言っただけの不安がたくさんあった。この不安を払拭してくれたものは、多民族多文化を受け入れるインドネシアというおおらかな文化であり、インドネシアの方々の前向きな心だった。水泳教室を一緒に開催してくれたE先生を始め、子どもたちを任せてくれたM校長先生、応援してくれた保護者の皆様、そして子どもたち。また、一緒に指導にあたってくれたジャカルタ日本人学校の先生方、いつも私の送り迎えをしてくれ、いつも良いところ合いにビート板を片づけに来てくれる私の運転手Tさん、洗って乾しっぱなしにしているビート板をきれいに片づけておいてくれる家政婦のOさん。私の「やりたい」というこの気持ちを多くの方々が助けてくださったおかげで、帰国までの間、充実した水泳教室を開催し続けることができた。

また、子どもたちが言葉の壁を越えて、心を開いてくれたことに多く支えられた。私のたどたどしいインドネシア語を聞く中で、自分とは違う文化であることを子どもなりに肌で感じていたのか、JRの「優しい」行動を言葉にしたくて困っているときにもAは「バイク ハティ〜!!」と胸の前に指でハートをつくって教えてくれた。こだわりの強さや落ち着きのなさ等は、障がい故の行動であるため、そこは、あらかじめ内容を提示しておいたり、興味が違うところにはいかにないように視覚から入る情報を制限できるよう場の工夫をしたりした。水泳を楽しむ中で、「土曜日はマタハリの日」という予定を立てられるようになり、私の求める次の練習に進んでいきたいという意欲から身近な目標を立て、達成していく喜びを感じとってくれた。この達成感が自信となって子どもたちの中に根付いていく様子から、私自身にも達成感があった。

今後、地球市民を見据え、再び異国へ行き、世界にいる障がい児への水泳教室を展開していきたい。